東洋哲學に於ける認識研究

青木晦藏

一、緒言

支那哲學の中にも認識に關する思想がないではないが、之を西洋哲學の認識思想に較ぶれば極めて幼稚たるを免れない。是は支那に於ては實際有用の學のみを重んじて、空理無用の學を好まなかつた結果此に至つたもので已むを得ないことである。然したとひ幼稚であつても、古代の諸家が持つて居つた論理認識の思想を擧げて一瞥したならば、隨分面白いことであらうと思ふが、今精しく述べて居る暇がないから、唯その一斑を窺つて見ることにせよう。先づ儒家の人々に就て之を見るに孟子が告子と義の內外を論じたのが認識思想の見えて居る初めであらう。孟子は義は內なりと云ふに對して、告子は義は外なり內に非らずと云つて居るが、內といひ外といふのは、主觀客觀又は觀念實在などいふ意味であらう。その後荀子に至りては、その思想が頗る進步し、正名論を著して論理認識に關することを論じて居る。儒家の論理認識に關する議論の中では此れ以上の進步した思

六五

ないと云つて宜しからう。他の學派に於ては、墨子にも論理認識に關した斷片的思想のあつたことは、その著墨子の經及び經說を見れば分る。今その一を擧げていふならば

經、知、材也。經說知也者、所二以知一也。而不二必知一。若レ目。

經、知、接也。經說知也者、以二其知一遇レ物而能貌レ之。若レ見。

とある。前者は吾人には意識的本能を持つて居るから能く事物を知ることが出來る。然し意識的本能を有つて居るからといつて、それが智識であるとは言へない。言ひ換へたならば主觀ばかりでは認識が出來ないといふことを說いたものである。後者は知る所以の意識と客觀に實在する事物と相接觸して始めて認識が出來るのであるが、客觀の事物ばかりでは認識することが出來ないといふことを說いたものである。墨子には此の如き說が澤山述べてあるが要するに斷片的のもので未だ完成した說と見ることは出來ない。その後に至り公孫龍惠施の徒も專ら此等のことを論じて居る。惠施のいふ所を見れば至大無レ外。謂二之大一。至小無レ內。謂二之小一。とか、無厚不レ可レ積也。其大千里也。とか、天與レ地卑。山與レ澤平などといつて居る。公孫龍の白馬非レ馬の議論は有名なものであるが、その他にも指物論、通變論、堅白論などもあつて概念と實物との關係を述べて居る。之を惠施の議論に比すれば少し整つて居る點はあるが、要するに一種の詭辯に過ぎないものである。唯莊子に至りてはその認識に關する議論大に觀るべきものがある。是は別に論ずるに非らざれば悉すこ

とが出來ないから他日機を見てその研究した所を發表することゝして茲には精しく述ぶることを控える事にせよう。然し莊子の議論は先秦に於ける認識論中最も傑出したもので、何人も之に及ぶものゝなかつたことに對しては稱賛せずには居られないのである。兎に角先秦時代に於ては此の如く論理認識に關する思想が萠芽を發し、參天の大樹となるべき勢を持つて居つたのであるが、惜しいことは中途挫折して遂に大に發達するに至らなかつたことである。漢唐の時代は古代の思想を復興するに汲々として何等の新研究の出來なかつた時であるから、此の時代の思想には殆ど觀るべきものはない。況んや從來學者より空想視されて居る論理認識に關する議論のあるべき筈はないのである。然るに近世に至りて漸く哲學の研究が盛になつて、古代の思想を凌駕する程の深玄なる思想も現はれて來たので、認識に關する思想も古代とは頗るその趣を異にしたものがあつたのである。その中で程朱陸王の議論は頗る觀るべきものがあつて、西洋に於ける認識論と似通つてをる所があるのは奇と稱すべきものである。朱子は近世哲學の大成者でその學の博大にして精微なる點に至りては何人も追隨することの出來ない人である。朱子のいふ所に依れば事物及事物の理は客觀に實在すると共に主觀にも存してをるものであるが、吾人の知は衆理を妙べ萬事を宰するものであるから能く主客一致して認識することが出來るものであると見て居る。その論には頗る觀念を重んずる傾向を有つてをるが、理の實在を主張してをる點よりいへば實在論者といはねばなるまい。然るにその

後に起つた王陽明に至つてはその學の博大に於いては到底朱子に敵すべくもないが、精微の點に至りては頗る深玄に入りてをる人で、吾人の觀念以外に事物及び事物の理の實在することを認めず。宇宙に存する事物もその理も皆吾人の觀念に過ぎないと見て朱子の實在論に反對してをる。此の點よりいへば陽明の說は觀念論と見て差支ないと思ふ。朱子の實在論と陽明の觀念論とは、近世哲學に於ける一大偉觀で支那哲學を修むるものが是非共考究せねばならぬ所である。然し朱子にしても陽明にして認識論を說くのが主でないからその議論が往々形而上學又は倫理學と混同して居つて之を區別することは頗る困難である。余は務めてその認識論と形而上學又は倫理學とを切り離してその概略を述べて見ようと思ふ。その詳細なる議論に至つては他日東洋哲學概論中に論述して世の批評を仰ぎたい考である。

二、朱子の實在論

(一)、理とは何ぞや　朱子の認識に關する思想を明かにせんとするには先づ朱子の所謂理の如何なるものであるかを考察せねばならぬ。朱子の所謂理には所當然之理と所以然之理との二種の意義がある。故に朱子は

至二於天下之物一。則必各有下所二以然一之故。與中其所レ當然一之則。所レ謂理也。（大學或問）

といつてをる。而して所當然の理も亦之を二種に分つことが出來る。一は朱子の所謂事物當然の理で是は宇宙自然界に行はるゝ客觀的理法である。他の一は朱子の所謂人倫日用當然の理で是は人生界に行はる主觀的理法である。自然界に行はるゝ理法も人生界に行はるゝ理法もその根源は同一體のものであるが、唯その對象によりて之を區別したに過ぎないのである。所以然の理は客觀的理法及び主觀的理法の根源といふべきもので最高至極の根本原理である。朱子は孔子の說に從つて又之を太極と名づけてをる。その言に

上天之載。無聲無臭。而實造化之樞紐。品彙之根柢也。（太極圖說解）

といつてをるものが是である。此の最高至極の根本原理の太極と他の客觀的理法及び主觀的理法とは如何なる關係があるかと云ふに不離の方面よりいへば太極を離れて別に主觀客觀の理法の存するでなく又主觀客觀の理法を離れて別に太極の存するものでもないから同一不二といふべきである。然し不雜の方面より之を見れば太極は太極であり、主觀客觀の理法は主觀客觀の理法であるから同一不二といふことは出來ない。之を非一非二の關係といつて宜しからうと思ふ。

朱子の所謂理は此の如き性質のものであるが更にその言によりて稍詳述して見よう。朱子は事物當然の理法でも根本的所以然の理でも客觀的に實在してをるものと見て居るのである。故にその言によれば

事々物々。皆有二定理一。（大學或問）

天道流行。造化發育。凡有二聲色貌象一。而盈二於天地之間一者。皆物也。既有二是物一。則其所三以爲二是物一者。莫不各有二當然之則一。而自不容己。是皆得二於天之所一賦。而非二人之所一能爲也。今且以二其至切而近者一言之。則心之爲物。實主二於身一。其體則有二仁義禮智之性一。其用則有二惻隱羞惡恭敬是非之情一。渾然在中。隨感而應。各有攸主。而不可亂也。次而及二於身之所一具。則有二口鼻耳目四肢之用一。又次而及二於身之所一接。則有二君臣父子夫婦長幼朋友之常一。是皆必有二當然之則一。而自不容己。所謂理也。外而至二於人一。則人之理不異二於己一也。遠而至二於物一。則物之理不異二於人一也。極二其大一則天地之運。古今之變。不能外也。盡二於小一則一塵之微。一息之頃。不能遺也。（大學或問）

といつて居るが此と同一の意味の言は朱子の著書の中に多く散見して居る。此に由りて之を觀れば朱子は天下の事物が吾人の客觀界に存するを認めたのみでなく、理法なるものも同じく客觀界に存在してをるものと認めたことは最も明白にして疑ふべからざる所である。而して朱子は自然界に於ける理法よりは人生界の理法に重きを置いてをる人であるから又左の如くいつて居る。

所當然之則。如二臣之仁臣之敬一。所二以然一之故。如二君何故用一仁。臣何故用一敬一。如三君之所二以仁一。蓋君是箇主腦。百姓人民皆屬二他管一。他自是用二仁愛一。非說下是爲一君了。不得一己以二仁愛一行之。

自是合レ如レ此。若三天使二之然一。又如下父之所二以慈一。子之所中以孝上。蓋父子本同一氣。只是一人之身。分成二兩箇一。其恩愛相屬。自有二不レ期レ然而然者一。其他大倫皆然。皆天理使二之如レ此。豈容二强爲哉。（朱子語類）

此は事々物々に於ける所當然の理と所以然の理とに就て述べられたもので、所謂一理の散じて萬理となつたものである。然るに事々物々に散在する萬理の根原には、之を統一してをる一の根本原理が存在してをる筈で、是れが前に述べた所の太極その物である。朱子は此の最高至上の根本原理も矢張り客觀界に存在して居るものと認められたのである。萬物に於ける理と統一の原理なる太極との關係に就て朱子が

自二萬物一而觀レ之。則萬物各一二其性一。而萬物一太極也。蓋合而言レ之。萬物統體一太極也。分而言レ之。一物各具一太極也。（太極圖說解）

萬物皆有二此理一。理皆同出二一原一。但所レ居之位不レ同。則其理之用不レ一。如二爲レ君須レ仁。爲レ臣須レ敬。爲レ子須レ孝。爲レ父須レ慈。物々各具二此理一。而物々各異二其用一。然莫下非二一理之流行一者上也。（朱子語類）

といつてをる所を觀れば萬物に存す所當然の理及び所以然の理もその根源に於ては同一體のものであることが分る。田毎に映る千顆萬顆の月も、天上に在る月もその存在の場所は異なつてをる樣に見

ゆるがそれは現象の世界から見たものでその本體の世界より見れば畢竟一顆の月に過ぎないと同樣のものである。萬事萬物に映れる理もその歸する所は一の太極といふ根本原理があるのみである。明の蔡靈齋といふ朱子學者が朱子の意を說明して

凡言事物所以然之故。蓋有自統體而言者。亦有以遂事言者。如論語五十而知天命。註曰天命卽天道之流行。而賦於物者。乃事物所以當然之故也。此則自其統體者言。如大學或問曰。於凡天下之理。皆有以見其所當然而不容已。與其所以然而不可易。此所以然則事々物々。皆有箇所以然也。（四書蒙引）

といつて居るのは正當の解釋でよく朱子の意を得たものである。之を要するに統體の理は全體にして逐事の理は部分である。全體を離れて部分なく部分を離れて全體のあるべき筈はないから根本の一理と事物に散在してをる萬物とは同一體といつて宜しい。その事物に存する萬理が客觀界に存するものならば根本の一理も客觀界に存在してをることは論を俟たない所である。

然るに朱子は理を以て客觀界に存するものと認むるのみでなく主觀界にも存するものと認めて居つたのである。故に

渾然一理。具于吾心。不可移奪。（朱子語類）

心之全德。莫非天理。而不能不壞於人欲。故爲仁者。必有以勝私欲而復於禮。則事

皆天理。而本心之德。復全於我矣。（論語集注）

心之體具乎此理。理則無所不該。而無一物之不在。然其用實不外乎人心。（朱子語類）

などといつて居るが此に類した言は文集語類等の諸處にも散見して居る。明の林希元が之を說明して「人心の靈知るあらざる莫く天下の物理あらざる莫し。此の理皆吾が心に具りて心の知る所理に外ならずといひ又物外に在りと雖も其の理は吾が心に具はる。萬物皆我に備はると說く所以也」といつて居るのは朱子の本意を得た說である。何が故に理が吾が心に具つて居るかといへば萬理一原に出でて天下の物一としてその理を得て居らぬものはないのであるから人も亦此の理を心に受けて生れ來つたものと謂ふべきが故である。此に由りて之を觀れば理が客觀に實在すると共に吾人の心卽ち主觀にも具はつて居ることは疑を容れない所である。朱子が此の如く理が宇宙に徧在し人生に普遍して實在して居るものと見た點は觀念論者の陸象山と能く似て居る所があるのは奇と謂ふべきである。陸象山の言には

塞宇宙一理耳。學者之所以學。欲明此理耳。此理之大。豈有限量。（象山全集卷十二）

此理在宇宙間。未嘗有所隱遁。天地之所以爲天地者。順此理而無私焉耳。人與天地並立。而爲三極。安得自私而不順此理哉。（同卷十一）

此理充塞宇宙。天地鬼神。且不能違異。況於人乎。誠知此理者。當無彼己之私。（同卷十一）

といつて居るのがある。此等は朱子の說と異なつてをる所はないが、朱子は理を說くこと精密で陸象山は疎略である所が異なつて居るのみである。此の如く朱子も陸象山も共に理が宇宙人生に遍滿してをるものと見たる點より言へばその說は純理論（又唯理論又は合理論）といつて宜しいと思ふ。西洋の合理論などと較べて見たならば多少の相違があるのは勿論であるが兎に角余は之を純理論と名づくることにせよう。余には此れが最も適當したる名稱であると思ふ。

（二）、知とは何ぞや　然らば朱子は如何にして認識することが出來るものと考へて居つたのであるか。之を考察して見ねばならぬ。認識するには認識せらるゝ客體と認識する主體との存在を俟たねばならぬのである。認識する主體のみがあつて認識せらるべき客體がなくては認識といふことは成立しない。又認識せらるべき客體のみがあつても認識する所の主體が存在しなかつたならば是れ亦無論認識の成立すべきものではない。既に朱子に就て認識せらるべき理が客觀界に存在してをることを知りたれば是より朱子の認識する主體に就ての思想を知らなくてはならぬ所に立ち至つたのである。此に就ては朱子は左の如く言つて居る。

人之所以爲學。心與理而已矣。心雖主乎一身。而其體之虛靈。足以管乎天下之理。理雖散在萬物。而其用之微妙。實不外乎一人之心。初不可以內外精粗而論也。然或不知此心之靈。而無以存之。則昏昧雜擾。而無以窮衆理之妙。不知衆理之妙。而無以窮之。則

偏狹固滯。而無以盡此心之全。此其理勢之相須。蓋亦有必然者。（大學或問）

此に由りて之を觀れば吾人の心の中に具はれる虛靈不昧の知なるものは宇宙人生すべての理を統管して居るものであるから理は客觀界に實在してはをるが實は吾が觀念に入りて始めて存在を認めらるゝのである。故に理はその實吾人の觀念に外ならないものであるから理は客觀に實在して居るもので觀念以外のものであるなどと論ずるのは間違ひである。主客一致の所に理は存在して居るものといはねばならぬといふのが朱子の本旨のやうに思はるゝのである。然るに陽明は朱子の此說を捕へて支離決裂の見であるといつて攻擊して居る。

晦庵謂人之所以爲學者。心與理而已。心雖主乎一身。而實管乎天下之理。理雖散在萬事。而實不外乎一人之心。是一分一合之間。而未免已啓學者心理爲二之弊。此後世所以有專求本心遂遺物理之患。正由不知心卽理耳。夫外心以求物理。是以有闇而不達之處。此告子義外之說。孟子所以謂之不知義也。（傳習錄卷中）

といふのが陽明攻擊の言ひ草である。陽明の如き理を心に求めて心外理なし心外事なしといふ思想を有して居る觀念論者より之を見れば朱子が人之所以爲學者。心與理而已。といふ議論は告子義外の說と同じやうに支離の見と見ゆるのは有り得べきことである。然し朱子の所謂理とは客觀に實在して居る客體で被認識的のものであり心とは吾人の觀念で認識する主體であつて認識といふことは

主客一致によりて成立するものであると見たのは强ち支離といふことは出來ない。何となれば朱子には主觀と客觀とを別々に存在するものと見ずしてその極致は一體のものと見てをるからである。此は朱子と陽明との學說の相違から來てをるものであるからその認識上に於ても意見の相異することは已むを得ないと思ふ。然しその說の中正穩健よりいへば朱子の說を推さゞるを得ない。

一體認識する吾人の知は如何なるもので又その知には少しの誤謬のないものであるか否か。此に就て朱子は如何なる意見を有して居つたかを考察して見ねばならぬ。朱子は吾人の知なるものは天より賦與せられて吾人が先天的に固有して居るもので衆理を具へ萬事に應ずる作用をなすものであると見て居つたのである。故にその言に

知則心之神明。妙(スベ)二衆理一而宰二萬物一者也。（大學或問）

心之爲レ物。至虛至靈。神妙不レ測。常爲二一身之主一。以提二萬物之綱一。而不レ可レ有二頃刻之不一レ存者也。（大學或問注）

といつて居る。吾人の心の知は此の如く衆理を具へ萬事に應ずる靈妙不可思議なるものであるから朱子の所謂は經驗上より來る知識ではなく吾人が先天的に有するもので孟子の所謂良心又は良知といふべきものである。然し先天的靈知であるから聞見上の經驗知に關してをらぬのでない。靈知は聞見の經驗的知識にあらずといへども亦經驗的知識を離れたものでもないと見るのが朱子の本旨で

ある。故に朱子は知猶レ識也といつて居る。此は體用並せ言つたものであるから朱子の說は純理的知と經驗的知との合一をいつたものと謂ふべきであると思ふ。盧玉溪（朱子學派の人）が朱子の說を述べて

心之神明。卽所レ得二於天一。而虛靈不昧者也。心固具二衆理一。而應二事物一。所下以妙二衆理一而宰中事物上者。非二心之神明一乎。其表與レ裏洞然無レ不レ盡。則心之用與レ體。無レ不レ明矣。

といつて居るのは能く朱子の意を得たものである。吾人の心の靈知は此の如く虛靈不昧にして衆理を妙（ス）べ萬物を宰するものであるが此の靈知はいつも虛靈不昧にしてよく萬物の理を照すものではなく氣禀物欲の爲めに蔽はれてその知の曇ることがないではない。もしその靈知に曇りが生じたならば正確に認識することが出來なくなるのである。故に吾人が正確に宇宙及び人生に於ける一切の理を認識せんとするにはその靈知を蔽うてをる曇りを除き去らねばならぬ。かくして始めて正確に認識することが出來るやうになるものであると云ふのが朱子の意の在る所であると思ふ。故に朱子は左の如く言つて居る。

其所レ賦之質。淸者知而濁者愚。美者賢而惡者不肖。又有二不レ能レ同者一。必其上智大覺之資。乃能全二其本體一。而無二少不明一。其有レ不レ及二乎此一。則其所レ謂明德者。已不レ能レ無三蔽而失二其全一矣。況乎又以二氣質有レ蔽之心一。接二乎事物無窮之變一。則其目之欲レ色。耳之欲レ聲。口之欲レ味。鼻之欲レ臭。

四肢之欲二安佚一。所三以實二乎其德一者。又豈可レ勝レ言也哉。二者相因。反覆深固。是以此德之明。目益昏昧。而此心之靈。其所レ知者。不レ過二情欲利害之私一而已。（大學或問）

故に格物致知卽ち認識するには先づその本源の心地を涵養して置かねばならぬのである。平日に當りて能く吾人の本心を涵養すると共に靈知を蒙蔽する所の私欲を除き去つたならば吾人の靈知は明瑩洞徹して宇宙人生の眞理を認識することが出來るものである。私欲を去るは消極的の工夫にして本心を涵養するは積極的の工夫である。此兩者の工夫と致知とは相離るべからざる關係を持つて居るものであるから朱子は常に居敬窮理を絕叫して居らるゝのである。その言によれば

學者工夫。惟在二居敬窮理二事一。此二事互相發。能窮レ理則居敬工夫日益進。能居レ敬則窮レ理工夫日益密。譬如二人之兩足一。左足行則右足止。右足行則左足止。又如三一物懸二空中一。右抑則左昂。左抑則右昂。其實足是一事。（朱子語類）

涵養中自有二窮理工夫一。窮二其所レ養之理一。窮レ理中自有二涵養工夫一。養二其所レ窮之理一。兩項都不二相離一。才見成二兩處一便不レ得。（同　上）

心包二萬理一。萬理具三千一心一。不レ能レ存二得心一。不レ能レ窮二得理一。不レ窮二得理一。不レ能レ盡二得心一。（同上）

といつて居るが此等は皆同一の意味を述べたものである。此に由りて觀れば吾人が認識するには是非共その本心の涵養を怠つてはならぬ事は明かで本心を涵養すれば致知が出來て理が明かになる。

理が明かになれば本心も圓滿完全になるものであるから涵養と致知はその終極の處で合一することになる。故に朱子は主レ敬窮レ理。雖二二端一其實一本。ともいつて居るが左の言は一層その意が明かに見えて居るから更に引用することにせよう。

聖人設レ教。使丁人默二識此心之靈一。而存丙之於端莊靜一之中甲。以爲二窮理之本一。使丁人知レ有二衆理之妙一。而窮丙之於乙學問思辨之際甲。以致二盡レ心之功一。巨細相涵。動靜交養。初未三嘗有二內外精粗之擇一。及二其眞積力久而豁然貫通一焉。則亦有四以知三其渾然一致。而果無二內外精粗之可レ言矣。（大學或問）

此れが居敬窮理卽ち本心を涵養して天下宇宙の理及び人生一切の所以然の理所當然の理を認識してその心理合一卽ち主客一致の妙境に達することを說いたものである。その認識の方法に至りては種々ありて

若其用レ力之方。則或考二之事爲之著一。或察二之念慮之微一。或求二之文字之中一。或索二之講論之際一。（大學或問）

といふが如きはその一端であるが如何なる方法を用ふるにしても吾人は宇宙及び人生に關する眞理を徹底的に窮め盡せば吾人の知はそれと同時に豁然として貫通して宇宙及人生の眞理が明かになるのである。故に朱子は又

大學始敎。必使下學者卽二凡天下之物一。莫レ不下因二其已知之理一。而益窮レ之。以求レ至二乎其極一。至二於

用レ力之久。而一旦豁然貫通レ焉。則衆物之表裏精粗無レ不レ到。而吾心之全體大用無レ不レ明矣。

（大學章句）

といつて居るが此れ認識の極致の處を述べたものである。此に至れば主客もなく（朱子の謂はゆる內外）表裏もなく精粗もなく渾然たる一體の妙境である。此の妙境は全く吾人の直觀によるものであるが吾人が能く直觀し此に至ることを得るのは宇宙に存する理も吾人の心に存する理ももと同一體のものであるから吾人の靈知によれば能く之を洞觀することが出來得るものであるといふ理によりてその本心を涵養して窮理の根柢となし漸を追ひて天下の理を窮め窮めてその極に達し遂に大悟徹底の妙境に至つたものである。然し此の主客一致渾然たる一體の境地に到達するには吾人の知のみで爲し得らるゝものではない。知行並進によるものであることは勿論である。然し此れは朱子の知行論で述ぶべきことであるから此には之を省略することにせよう。

さて吾人が認識を爲す目的は何れに存するか。朱子によれば吾人の最高至上の理想卽ち至善に止まるに在るのである。更にいへば天下宇宙及び人生の理を認識してその意を誠にしその心を正しうし然る後その身を修めその家を齊へその國を治めその天下を平かにして人生最高の理想を完成するといふのが朱子の說であり又儒學の說である。至善とは明德新民の極則でこれ以上吾人の目的とすべきものはない。此の目的に到達せんには是非共宇宙人生の理を認識して此に由りて進まねばなら

ぬのである。故に朱子は左の如く言つて居る。

德之在レ己而當レ明。與二其在レ民而當レ新者一。則又皆非人力之所レ爲。而吾之所二以明而新レ之者。又非レ可下以二私意苟且一而爲上也。是其所下以得二之於天一。而見レ於日用之間一者。固已莫レ不三各有二本然一定之則一。程子所レ謂以下其義理精微之極。有中不レ可二得而名一者上。故姑以二至善一目レ之。而衆人之心。固莫レ不レ有レ是。而或不レ能レ知。學者雖二或知レ之。而亦鮮二能必至レ於レ是而不レ去。此爲二大學敎一者。所下以慮レ其理雖二略復一。而有レ不レ純。己雖二粗克一。而有レ不レ盡。且將レ無下以盡二夫修レ己治レ人之道一。故必指レ是而言。以爲中明德新民之標的上也。（大學或問）

此に由りて之を觀れば至善は明德新民の極則にして客觀に存するものゝ如くであるがその理亦吾が心に外ならざるものなれば吾が心を除いて外に至善のあるべき筈はないのである。故に吾人がその理想の境に到達したるときには吾が人格が完成せらるゝと共に天下社會の安全幸福をも完成せられて主客一致天地萬物一體の仁が實現せらるゝのである。此れが人生の極致である。此の如く見るのが朱子哲學の本旨であらうと思ふ。果して此にして謬りがないとすれば朱子の認識上に於ける學說は一面より見れば實在論的認識論であるが又他の一面より見れば觀念論的認識論といへぬこともない。之を要するに東洋哲學は明白にそれが區分せられて居らぬから後世より區分することは頗る困難である。但朱子の說は之を陽明の說に比して見れば實在論的分子が多いことは間違のない所で

あるから假に之を實在論と名づけたに過ぎないのである。（未　完）

八二